もし生物学的な社会性が問題になりうるなら、言語体系として捉えられる情報はすでに言語以前にインプットされている可能性もある。もちろん、これは内容のあるものではなく、儀礼的な言語のような、決まり決まった情報のやり取りにすぎないかもしれない。

とはいえ、それは生きた人間と人間の血の通う情報を運ぶものともいえる。同情や憐憫といった感情が、まさにこのネオテニー状態にあるとすれば、言語体系でもたらされた情報より勝るものを、それは持っていると言えるからである。

おそらくこうした言語以前の情報体系を知るには、人類の奥底に眠る生物学的な根源を脳研究が調べ尽くすことを待つしかないのだが、その意味でも非文字資料研究にとって最近の脳研究の進歩は見逃すことのできないことであると言えるかもしれない。

調査研究エッセイ

文化大革命の洗礼を受けた人と文化財の数奇な運命 ―中国浙江省廿八都調査からの報告―

津田　良樹（非文字資料研究センター　研究員）

中国浙江省の西端に、福建省に接し、江西省にも近い廿八都という古くからの宿駅がある。古くは弘法大師が福建省の海岸部福州に着き、福建省内を通って、この廿八都を経て長安に行ったのだという。そのためか、多種多用な豆腐が廿八都にあることと相あわさり、この町の豆腐を弘法大師が日本に伝えたとの伝承がある。廿八都は、南流する楓渓に沿って南北に細長い街村をなしている。南の福建省側から楓渓を屋根付橋の水安橋で渡ると細長く楓渓村が続き、街並みが少し途切れた先に大きな塊状をなす花橋村と浔里村がある。

ここ廿八都の調査をする機会をえて、2008年8月24日から9月1日にかけて現地調査を行った。その間に気づいた点について以下に報告したい。

廿八都は先にあげた3省に近接して位置している。そのため、各省の異質な文化が融合し、かつ混在しつつ、伝統的文化を濃密に残していることで知られている。廟や民居などの古建築も多く、清初から民国時代の建造物群によって街並みが形成されているといわれている。しかし、古建築の建築年代については必ずしも根拠が明確でない場合が多い。廿八都の古建築について最も詳しい『廿八都鎮誌』(1) にも古建築の建築年代を記すものもあるが、その根拠を明記するものはない。それは、建築年代を裏付ける文献資料が極めて少ないことに起因していると思われる。日本に比べ本来文献資料が少ない上に、文化大革命によって徹底的に破壊・破棄されたからである。建築の世界においては、建築様式による年代判断もまったく不可能なことではない。しかし、それも絶対年代が明確な基準となる事例が要所にあり、それらを基準に様式を比較検討し、前後関係を判定するなどして、建築年代を絞り込んでゆく編年的手法によって始めて可能になるものである。そこで今回の調査では建築の細部意匠による編年を行い年代判定の規準を作ることを目論んだ。従来いわれている建築年代を再検証するために、基準となる基礎データを集めることにした。まず手はじめに、裏付けとなる根拠は示されていなくても絶対年代が伝えられている事例について、裏付け資料を確認することにした。今回の調査期間に調査した4件の事例を見ていこう。

水星廟　水星廟は、楓渓村の北より楓渓橋際に南面して建つ。北方を守護し水神・武神でもある真武神を祀り、真武廟とも称される。廿八都の南側にそびえる火山である香炉山に対峙して建てられたと伝えられる。『廿八都鎮

(1)『廿八都鎮志』中国文史出版社、2007年1月

写真1 文昌閣

写真2 菜種油絞り小屋の土間に埋め込まれた文昌閣石碑。手前と奥の2枚が見える

写真3 菜種油絞り小屋

文昌閣

志』には「清同治七年建」とされる。裏付ける資料は境内南東隅に立てられた石碑であるようだ。この石碑「重脩水星廟碑記」は1996年すなわちつい12年前に立てられた新しいもので、そのなかに創建年代については「水星廟始建于清同治七年是構成」とされ、その後1996年に修理が行われたことが記されるのみである。12年前に100年ほど前の同治7（1869）年に創建されたと記すには何か拠り所となる資料があるはずだが、古老の言い伝えによって作られたとされるばかりである。また、同様な石碑が元々あったが、文化大革命時に破壊されたのではないかともいわれている。

文昌閣 文昌閣は水星廟から200mほど南よりに、東面して建つ。同一鎮内に文昌宮（大文昌閣）があるため、通称小文昌閣と呼ばれる。文昌閣に関する資料としては、現在鎮の南端近くの川向こうに位置する菜種油絞り小屋の土間に埋め込まれた元文昌閣の石碑がある。小屋は現在使われてないが、石碑は菜種油を絞るための台にされていたようだ。もとは文昌閣の前方北よりの位置に立っていたが、文革時に倒され、菜種絞り小屋に移されたようだ（写真2）。石碑は文昌閣の由来を記す「添造文昌閣記」と寄附金について記す1枚とである。「添造文昌閣記」によると現在の建物は宣統庚戌（1910）年の開工（着工）、壬子（1912）年の告竣（竣工）である。

万寿宮 万寿宮は、鎮の南端水安橋の近くに南面して建つ。もと広西人の宿駅として造られたと伝えられるが、後に広西省南昌にある許真君を祀る道教寺院西山万寿宮にならって建てられたようだ。万寿宮はここ廿八都でも広西人の心の拠りどころであったといわれている。『廿八都鎮志』によると「明代末年、広西籍商人集資興建、清乾隆年拡建」とあるが、根拠となる資料はまったく不明である。

東嶽宮 東嶽宮は東嶽大帝を祀り、東嶽廟とも称される。鎮の街並みの最北浔里村から東方400mほどに位置する。病気・寿命・死後の世界などに関してご利益があると信じられている東嶽大帝が祀られている。

写真4

写真5

写真4 **東嶽宮**

写真5 **東嶽宮、流し台となった石碑。**
（石碑上にホース先端に蛇口を取り付けた仮設の水道や桶などが置かれていたが、写真撮影のため取り除いてある。）

東嶽宮

この東嶽宮には石碑が3枚残されている。2枚は中庭の隅に造られた仮設の流し台として2枚合せて使われている（写真5）。それらは東嶽宮の沿革に関する「東岳宮記」と寄附金に関する「碑石金縁」で、文章が刻まれた面を上面に洗濯板のごとき状態で置かれている。残る1枚は「東嶽宮、大清宣統庚戌二年合地捐輸建造芳名列后」で境内の片隅に無造作に立て掛けられている。「東岳宮記」には宣統元（1908）年の年紀があり、その記事の中に創建について「東嶽宮之建也始于明代萬暦甲戌重造」とある。記事にしたがえば、その後清の咸豊8（1858）年に焼払われ、同治4（1865）年に再建、光諸庚寅（1890）年に再び荒廃し、宣統己酉元（1908）年に北500mほどの地より現在地に移転・再建されたのが現建物であるようだ。この建物も文革時には荒廃しており、当時は塩造りの場とされ、さらに酒造りの場にもなったという。その間に石碑は取り払われ流し台に転用されるなどしたようだ。

以上4件の事例調査の中から見えてきた点を整理すれば次のようになろう。①『廿八都鎮志』などに絶対年代が示される事例は、石碑銘などの裏付け資料が多くの場合にはありそうであること。ただし、その資料は菜種油絞り台や流し台に転用されるなどの数奇な運命の末にかろうじて残った極めて幸運な例であること。そのかろうじて残った石碑はそのうち再評価されて、華々しく文化財として復活するのではないかと思われること。②細部意匠によって編年を行うためには、細部意匠も当然建築当初の事例でなければならないが、牛腿（華麗な彫物が施された持ち送り）や虹梁絵様などもまた文革の被害をうけ破壊されている場合が多いこと。さらに、被害を受けた後に近年再現されたものもあるが、その再現手法は当初の意匠を厳密に再現したものではなく、それらしくあればよしとする程度のものであること。以上のように文革後の資料や細部意匠などの取り扱いには十分な吟味が不可欠であることがわかる。ここで文化財が文革によっていかなる扱いをうけたかを、聞き取り等をもとに簡単に記す。即ち、①旧思想（石碑・柱の対連）、②旧文化（具象的な彫物）、③旧風俗（劇・神像）、④旧習慣（祭などの行事）は封建的なものとして破壊の対象とされたのである。これらの点は今も建物の現状などから再確認できる場合が多い。

文革の対象は建物ばかりではなく、当然人々にも降り懸かったことは言うまでもない。現地で御教示を賜った楊慶山氏（82歳）は元教員であり、当時教務主任を務めていたこともあって、批判される側に立たされたと淡々と語る。また、当時文革に対してどのような考えを持っていたのかとの、ぶしつけな私の質問に対し、「政府が正しいとして、自分の意見はないほうがよかった」と語る。ぶしつけな質問をした私も思わず楊先生の歩んだ数奇な運命を想像せずにはおれなかった。

本稿は日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究A）「中国における民俗文化政策の動態的研究」（研究代表者　福田アジオ）による研究成果の一部である。